

第76回センバツ大会

毎日新聞 (夕刊) (第3種郵便物認可)

2004
第76回
センバツ高校野球
主催 毎日新聞社・日本高校野球連盟

第5日
阪神甲子園球場

第5日の27日は1回戦の3試合が行われ、第1試合は明德義塾(高知)と桐生第一(群馬)の甲子園優勝経験校同士が対戦。明德義塾が主戦・鶴川の好投と集中打で桐生第一を降し、3年連続の初戦突破を果たした。第2試合は11年ぶり6回目出場の八幡商(滋賀)と初出場の常葉菊川(静岡)がぶつかり、第3試合は佐賀商(佐賀)と金沢(石川)の顔合わせとなった。



⑤

神戸市中央区の旅館「宝月」は81年に甲子園出場チームの受け入れを始め、86年夏からは沖繩球児の定宿だ。おかみの正垣和子さん(57)は、選手が風邪をひかないよう室温をこまめに調節したり、沖繩料理をメニューに加えたりと気

沖繩球児の定宿、旅館「宝月」おかみ、正垣和子さん(57)



が、修理には多額の費用がかかる。営業面の不安もある。「もう無理かも」。無事だった球児の写真やサイン色紙を見ながら、そう思った。

泣き笑い、選手と一緒に

を配る。球児に「おばさん」と慕われる正垣さんは一度だけ、旅館を廃業しようと考えたことがある。95年1月の阪神大震災。激しい揺れで建物は半壊。従業員は無事だった

高野連関係者が沖繩から安否確認に来てくれた。空路入りした大阪からは徒歩だった。ガスボンベや野菜を持って来てくれた人もいた。「宝月はウチナンチュ(沖繩の人)の心の千里、やめないで」

「一緒に泣いたり、喜んだり。選手といると同じ十七、八歳の気分になれる」。ホテルを利用する高校も増えたが、選手と従業員の距離が近く、アットホームな雰囲気は旅館ならではの体がかかず、高校生に戻れなくなったら引退します。それまでは選手と一緒に頑張りたい」と柔和な瞳を輝かせた。

と再開を望む声や寄付も相次ぎ、正垣さんらの再建意欲を呼び起こした。宝月は一年半後に再開、97年春から再び球児を受け入れ始めた。99年春には、ついに念願がかなった。沖繩尚学のセンバツ優勝。沖繩勢の甲子園制覇は春夏通じて初の快挙だった。「旅館を続けて本

文・写真 勝野俊一郎
11つづく